造形体験の中で習得したことを活かし，表現の追求ができる子どもの育成

－　小学６年「とばした時にキレイに見えるカラーリングをしよう」の実践から　－

１．授業の構想

図画工作では，表現と鑑賞を大事にしている。それら二つは常にワンセットであると考え，授業内に取り入れるようにしている。様々な素材や画材又は道具とふれあったり，道具や技法を用いたりして製作活動を行う。常に目新しい画材や題材を用意するのではなく，今まで扱ったものを見直した題材や，日常的に使っているもの，慣れ親しんだ道具や素材が図画工作の授業の中で多く用意されている。同じような素材や題材を用意しても，できあがるものは学年によって様々である。これまでに造形活動の中で体験したこと，習得したことが違っているからである。経験を基にした製作活動は，どの題材においても行われているものである。習得したことから，表現にあった技法を選んだり，素材を組み合わせたりすること。また自分や友だちの作品について意図を伝えるといった取り組みを高めていくこと。その二つのこと等を意図的に授業の中に位置付けることで，目的に向かっての児童の表現活動が深まる。そのうえで，子どもたちがこれまでに習得したことを，活用できる場，目的が必要である。本題材での自分らしい表し方を追求する事によって思考力・判断力・表現力を育成することを目指す。

６年生は，これまでに様々な製作・造形活動をしてきている。６年生の一学期では，手名刺製作を行った。手名刺では，名刺の役割を考え，そこに何を書けばいいのかを考える，自分の手の形や限られた色数の中でどう表現するのか，与えられた題材でいかに伝えたいことを表現するかを課題で求めた。題材や表現したいものに応じて，習得した知識や技能から，必要と思われることを選び出し，組み合わせて表現していく取り組みは，名刺作りでも有効であった。手の形の置き方や，指の使い方，三色（黒と自分で選んだ二色）の中で混ぜ合わせて色を作り出すなど，限られた中でも表現手段を選択し，名刺を作っていた。

遠近感を意識した絵画製作では，構図を考えたこと，自分で混色をして着色をすることをめあてに取り組んだ。製作場面では積極的に活動を行っていたが，何を意図して工夫をしたのか，表現をしようとしたのかを文章で書く場面になるとなかなか書くことが出来ない児童の姿もあった。そこで，教師が「どんな工夫をしたのか？どうしてこの表現をしたのか？」と問い掛けたり，ワークシートに取り組みを記録として残したりする事でより内容が充実していった。

それらの実態もふまえ，意識して習得したこと（限られた中での表現や色の選び方，色の組み合わせや塗り方，道具の使い方や自分の表現意図の文章化）が活かせる場を用意するために，本題材を設定した。

本題材は，ブーメランのカラーリングを考える活動を通して，より美しく見えるカラーリングをするという目的に沿ったものにするため，自分の知識や，経験を基に計画をたて製作を行い，そこで相互評価しあったこと，ふりかえったことで得た情報を基にさらに改善・改良しながらよりキレイと思えるブーメランをめざして製作を行う。短時間の活動の中でも経験を活用して表現を追求できる内容を設定した。

まず，本題材との出会いでは，紙コップからブーメランを作り，そこに自分たちでカラーリングを考える活動を意識させる。試作品を用意し，とばしてみせることで，これから自分たちがどんなものを作るのか，どんなものができるのかの見通しをもち，計画をたてようとする姿がみられることを期待している。その意識をもたせるために，試作品を示す事前にめあてを伝えておく。

その後の製作活動では，カラーリングの計画を元に実際にブーメランを作っていく。一号機から四号機を検証しながら順次作っていくことで，題材にじっくりと向き合えるようにする。「キレイに見える」という目的に向かって，試行錯誤を繰り返し，製作活動を行うことで題材と十分に向き合っていく。活動を通して，作品をよりよくしていこうとする児童の姿が生まれることを期待した。これまでの経験を基に習得したことを活かしてブーメラン作りをする活動の中で新たに感じたことや，製作に活かしていく姿勢がもてることを期待している。

そして経験を基に，形や色についてイメージを膨らませて次へと活かしていくことができることに気づかせ，経験を積む事で作品が目に見えて変化していく事に自信や作品の高まりを見いだしてほしい。また友達と相互評価をすることで，自分では気がつかなかったことに気づいたり，想像の広がりが生まれたりするようになってほしい。

2．活動展開計画（全４時間）

次	主な学習活動・内容	時	具体的な学習活動
1	キレイに見えるカラーリングの計画を立てよう。	1	教員が作ったブーメランを見ながら，これからの活動の見通しをもつ。 イメージを持って，カラーリングの計画を立てる
2	計画書を書いて，ブーメラン作りをしよう。	2 3	計画書をもとにブーメランを作る。 繰り返し作りながら，その活動の中で得た感覚・経験を基により目的に見合ったブーメランをつくる。
3	一号機から四号機を振り返ろう。	4	これまでの製作活動で，目的に向かって取り組めたかふりかえり，気づいたことや自分のブーメランについて，言葉で表現する。

評価計画

次	関心意欲態度	発想・構想の能力	創造的な技能	鑑賞の能力	共通事項	思考力・判断力・表現力
1 〜 3	「キレイに見える」と言う目的に向かって自分なりの表現方法を見つけようとしている。	予測や活動を基に，色の組合せを考えたり，模様を考えようとしたりしている。	「キレイに見える」ために12色のマジックを使ってカラーリングしようとしている。	お互いのブーメランを見合いながら，良さや，改善点を見つけようとしている。	色の明暗や，色と色の組合せをブーメランを作る中で感じ取る。	繰り返しの制作活動の中で，目的に向かって試行錯誤しながら，より良いものを目指して，表現手段を選び，作ろうとしている。

3．授業の実際

(1) 題材との出会い

導入では，加工前の紙コップを見せ，そこから教師が用意したブーメランを用い，どういった風に見えるのか，ブーメランとの出会いの場を用意した。始めに，紙コップをブーメラン型にしたものを見せた。紙コップを加工するのだと知って子どもたちはやる気を見せていた。さらに無地の紙コップをカラーリングすることを伝え，また，「ブーメランが飛んでいる時にもっともキレイに見えるカラーリング」というテーマも発表した。カラーリングするとはどういったものか，イメージがもてるように，教師が用意したブーメランを児童の前で披露した。ブーメランは二種類（縦縞で，２色のみでカラーリングした物と，横縞で５色使い，外へも内へもグラデーションになるようにカラーリングをした物）を用意した。それぞれを飛ばしてみせると，児童の中から，「おぉー！すごい」「縦縞の方がはっきり見える」「こっち（横縞）の方がきれい」などの感想がでていた。事前に，テーマを伝えておいたことで，そういうものを自分も作るんだという目的意識をもってのぞんでいることが分かる。この実際に作ったものを見せ，飛ばしてみせることで，児童の活動への意欲付けになった。

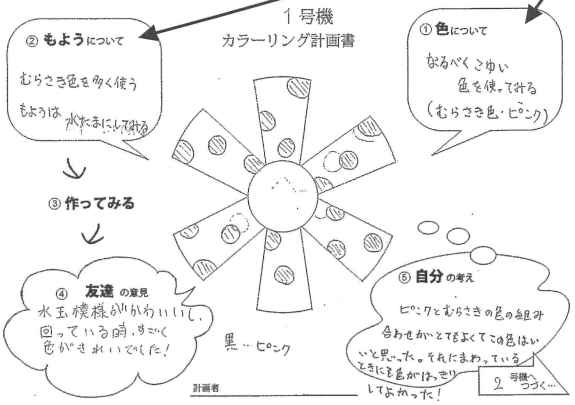
(2) キレイに見えるブーメランづくり

計画を立てて製作を行い，そこでの気づきを基に新たにブーメランを作るという繰り返しの製作活動を行った。活動の流れは次の通りである。**①ブーメランに使う色について考える。②模様について考える。③ブーメランを作る。④友だちに見てもらう。⑤前述の①から④をふまえた自分の考えを書く。**これらは計画書と同じにしてあり，それに従って，ブーメランのカラーリング計画を立てればいいようにした。「明るい感じにするために赤やオレンジを使おう。」「この色の組み合わせはなんかきれいそうだから使おう。」「とにかく全部使ってみよう。」など，これまでの経験や感覚を基にイメージしたり，試行錯誤したりする姿がみられた。

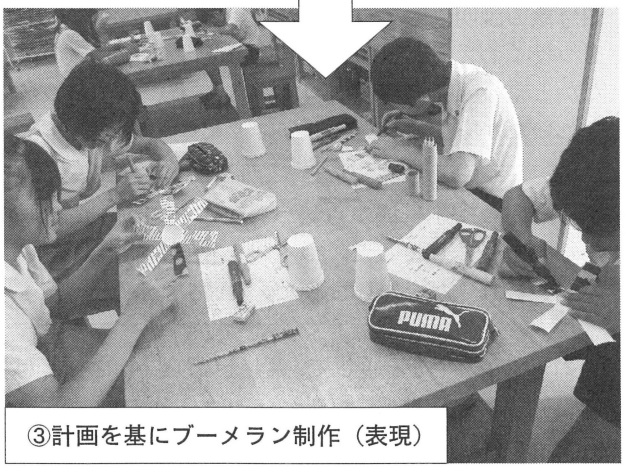
一号機の製作では，12色のマーカーでしか着色ができないことにとまどい，「イメージと違った」「イメージの色じゃない」といっている児童の姿も見られた。しかし，このイメージ通りにいかなかった，とまどったという経験はとても重要である。この経験で得た知識・感覚を活かして限られた条件の中で，よりよくしようとする，追求しようとする児童の姿が生まれるからである。実際，二号機からは，色の濃さを考えて塗る面積を変えたり，色の組合せを変えたりしていた。

④の友達の意見や自分の色や模様へのイメージ，立てた計画とできた作品とを照らし合わせることで，イメージと違ったり，予想外の良さがあると感じたりしたことを計画書の⑤に書いていく。意見交換や，ふりかえりの活動を入れることで，より目的を意識した活動が行えるようにするためである。計画書でまとめたこと，記入したことを基に二号機，それ以降の「キレイに見えるカラーリング」のブーメラン完成への製作へと繋げていた。製作を二号機，三号機と行っていく中で，新たな気づきを活かして，テーマに向け，さらに，試行錯誤をする姿が見られた。単独で黙々と製作をするのではなく，友達と飛ばし合いながら，楽しみながら活動をしていた。

〈実際の活動の様子と計画書との関連〉

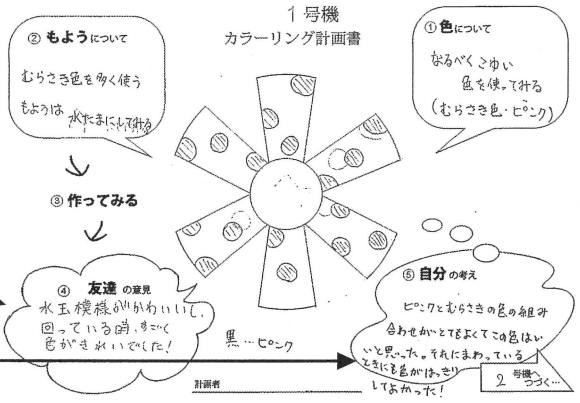


①・②ブーメランの色・模様を考える
（経験を基にした思考・判断）



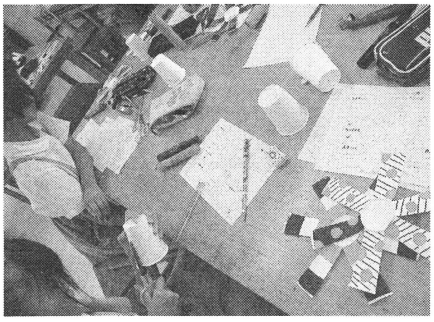
③計画を基にブーメラン制作（表現）

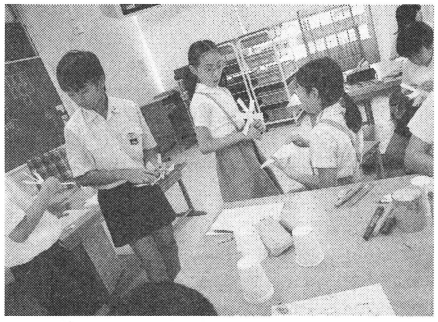
④とばしてみる、友達の意見を聞く（経験・気づきの発生）

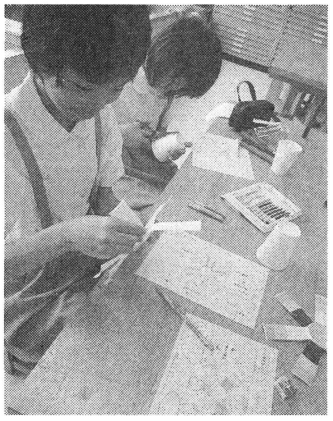


⑤自分の考えを記入

経験・気づきを基に目的に向かって製作を繰り返す（活用）





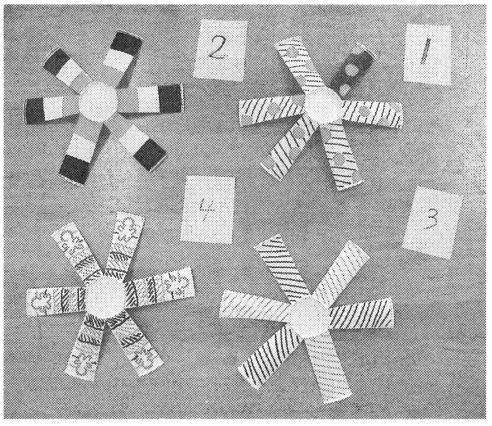


(3) 最終形態の四号機

まとめの部分では，試行錯誤をして作った四号機についての説明書を書き，一号機から四号機までを製作してみて気づいたことをプリントにまとめた。

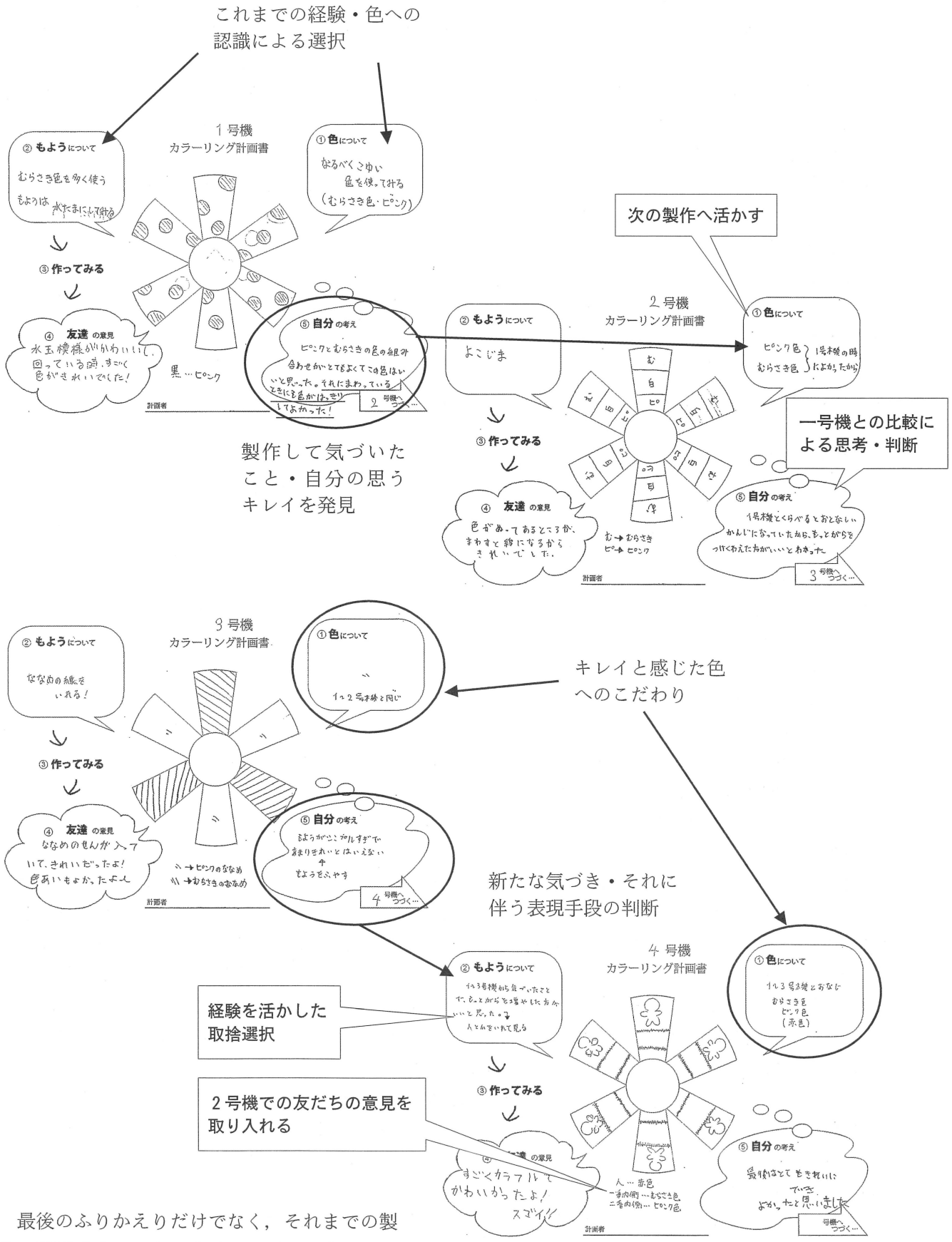
四号機の説明：もようは　よこじまにして　あらたに「人」をつけくわえてもようを多くしました。なぜこのようにしたかと言うととなりのプロペラと　よこじまがつながってきれいだからです。（A児）

ふりかえり：1号機から気づいたことをもとに2号機から3号機をつくりました。つくった結果，もようがいっぱいの方がきれいだと思いました。（A児）



これまでの活動を通して，自分なりにキレイとは何かを見つけ，ブーメラン製作をしていたことが分かる。また，自分の作品について製作を通して気づいたことや，友だちからの意見を参考にしながら，理由をつけて書くことが出来ていた。

A児の計画書（ワークシート）の変遷



最後のふりかえりだけでなく，それまでの製作の計画書をみても，自分のこだわりをもって友達の意見を参考にしたり，試行錯誤をしたりしながらキレイに見えることをめざそうとする姿勢が見られた。

A児を取り上げてみると，一号機の計画では経験を基にむらさきとピンクを選び，実際に飛ばしてみたことで2色の組み合わせが回してもはっきりと見え，よかったと実感している姿がある。A児はその時に得た感覚を大事にし，その2色にこだわって四号機までのブーメランを製作していることが計画書から伺える。そして一号機以降，選んだ2色を使い，よりキレイに見えるという目的に向かって，模様の試行錯誤を始めている。水玉から横縞，斜め線へと変化し，最終的に横縞の中に人型の模様を入れている。それは，シンプルな模様よりも柄を取り入れることでキレイに見えるとA児が判断したからである。模様を変えて製作をする度に，ふりかえりをすることで，自分の理想とするカラーリングを目指し，次の製作に向けて，経験や気づきから色の構成や柄の有無と言った表現の選択をしている様子を見て取ることができた。四号機では，それまでの製作や友達とのやりとりで気づいたこと，感じたことを基にして計画を立てることができていることが，計画書を通して見ることができた。

4．成果と課題

(1) 成果

今回，活動の中で，目的のために，必要に応じて素材や画材を選択し，友達との相互評価を取り入れることで，経験で得た技法を自分の感性で活用できるような題材を設定した。実際授業を行ってみると少しずつではあるものの，事前の製作での気づきを参考に次への製作を行い，キレイに見えるという目的に向けた工夫をしている姿が見られた。製作ごとに計画を立てることで，改善や工夫をした理由を書く姿や，自分の取り組みについてふりかえる姿が見られた。一号機の段階で使用する色を固定した後も色の配置の仕方を考えたり，選んだ模様の幅や色の組み合わせを考えたりしていた。また，毎回違う色，模様に挑戦するなど，自分にとってキレイとはどういった状態なのかを考え，感性を基にこだわりをもって試行錯誤を行っていた。自分の表現にこだわりをもって追求できたことは，作品が変化していく様子をはっきりと見て取れたことや，友達と一緒に飛ばしてみた時の印象についてお互いにコメントをしあったことで，意欲が高まり，発想の幅が広がったからだと考える。

製作を繰り返す活動やそのつど計画書を書く活動，また，友達と価値を共有する活動といった三つの活動によって表現の幅や構想が広がり，自分の作りたいものへのイメージを明確にすることができる。以上の活動を意図的に授業の中に位置づけることで，自分らしい表し方の追求が深まり，思考力・判断力・表現力の育成につながったと考える。今回の学習では，一つのめざすところへ向かって経験を基に表現方法の取捨選択を行うことができていた。その取り組みは，体験から感じ取り，体験を活用して自分らしい表現方法を追求しようとする姿であり，図画工作科で育てたい姿である。

(2) 課題

今回，活動の中で，計画書を活用する意図を十分に伝えることができず，部分的に記入を省く児童の姿も見られるなど取り組みの徹底を欠いていた。また，客観的な意見を得られるようにと友達の意見を聞く場も設定していたが，こちらも徹底して行うことができなかった。そうすると，計画書の内容も児童のイメージが明確にできるよう計画に適したものを設定したり，活動の過程で計画書を変化させたりする必要性や，具体的な書き方など明確に示しておく必要がある，といった課題が残った。自分の考えを文章化し，自分の取り組みをふりかえる場所を設定することで，より自身のもつイメージを明確化でき，それに応じた活用を行うことがさらに可能になっていくだろう。

また，少人数での鑑賞は行ったが，学級全体で作品鑑賞の場をもつことができなかった。これは，全体で価値観を共有し，よりよい表現の発見や，イメージ・発想の広がりをもつ機会を十分に得られなかった一因と言える。改善することによって，達成感を得たり，多様な価値観に触れたり，気づくことで，自身の経験が深まり，今後の造形活動における表現の広がりにつながっていくだろう。

構想でも述べたように，表現と鑑賞を一体として授業内に明確に位置づけることで，それぞれのよさが相互に働きかけ，児童の取り組みがよりスパイラル的に深まると考える。今後も，それを視野に入れた題材や教材の研究を継続していきたい。　（文責　矢野美穂子）